はじめに

北九州港は、本州と九州の結節点に位置し、瀬戸内海（周防灘）から関門海峡、そして日本海（響灘）に面し、北九州市内だけではなく、西日本地域の産業・経済を支える国際拠点港湾です。

その歴史は古く、明治時代中期から門司港・小倉港・洞海港の 3 港が、各々の特色を活かして発展し、昭和 39 年（1964 年）に 3 港の管理者が統合されて「北九州港」が誕生しました。それ以降、社会経済情勢の変化や求められるニーズに対応するため、港湾計画を改訂し、計画的な整備や一体的な管理運営など、国際競争力のある港づくりに努めてきました。

平成 24 年の改訂や、その後の一部変更等による現在の港湾計画では、再生可能エネルギー源を利活用する区域（洋上風力）や西日本で唯一の海洋再生可能エネルギー発電設備等拠点港湾（基地港湾）として関連計画を位置づけ、風力発電関連産業の総合拠点化に向けて整備を進めています。また、フェリー・RORO・自動車輸送の機能強化のための岸壁や航路拡幅、市民生活や企業活動から発生する廃棄物を処分するための海面処分場用地、市民が憩う緑地、耐震強化岸壁などを位置づけ、これまでその整備を進めてきました。

しかし、港湾を取り巻く情勢はこの十数年間で大きく変化し、新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」という。）の拡大や 2050 年カーボンニュートラルの実現、デジタルトランスフォーメーション（DX）の進展など、港湾をめぐる社会経済情勢が大きく変化するとともに、北九州港においても様々な課題が顕在化しています。

このような状況の中、港湾計画を見直すための第一歩として、北九州港の概ね 20～30 年後の将来の姿やそれを実現するための施策の方向性を示した北九州港長期構想（原案）を策定しました。長期構想では、3 つの基本理念のもと、将来の北九州港の目指す姿を 4 つの分野からまとめ、『地域経済と物流・産業を支え「グリーン」で「スマート」な未来を創造する北九州港』の実現に取り組んでいきます。

北九州港長期構想（原案）の策定にあたっては、学識経験者、港湾関係者や行政機関を構成員とする北九州港長期構想検討委員会を設置して、幅広く長期的な視点から検討頂きました。

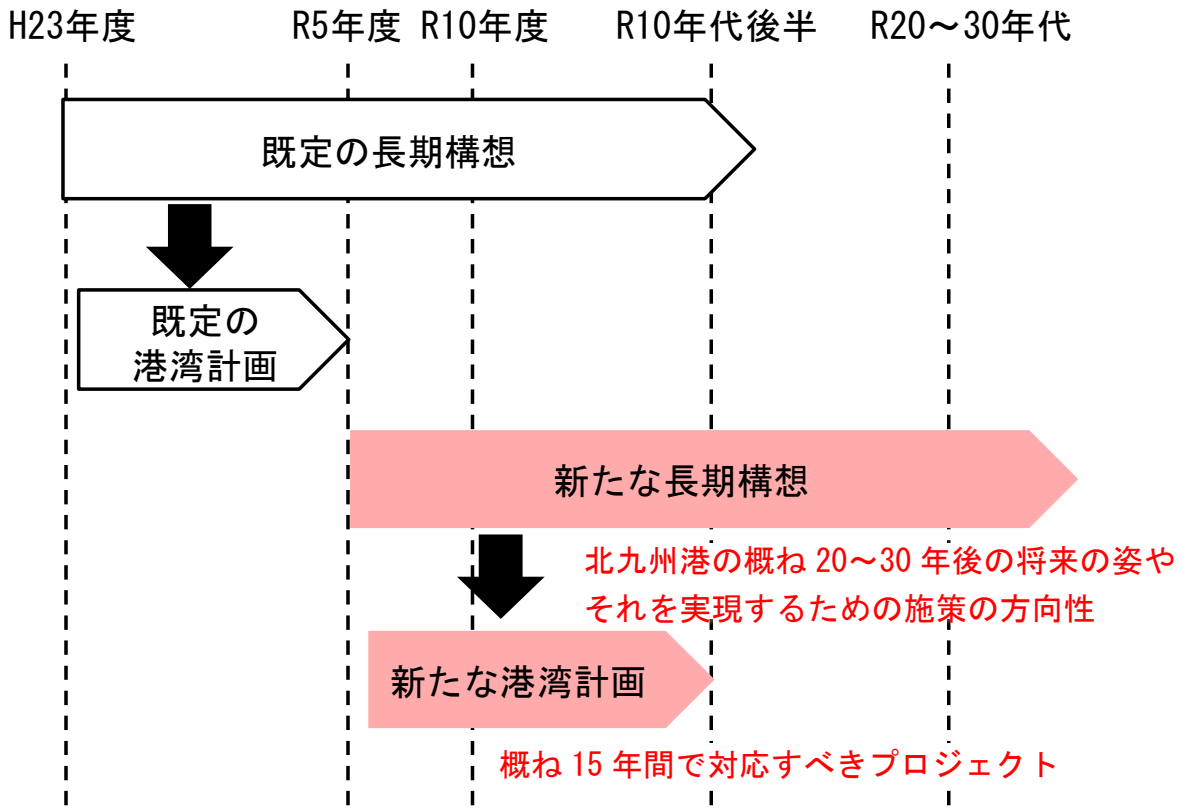
今後は、この長期構想を踏まえ、港湾計画の改訂に取り組み、北九州港の更なる発展を目指していきます。

～北九州港長期構想（位置づけ）～

①性格

この構想は、北九州港の概ね 20～30 年後の将来の姿やそれを実現するための施策の方向性を示したものです。

②港湾計画との関係

長期構想が示す方向性を受け、概ね 15 年間で、対応しなければならないプロジェクトについて新しい港湾計画に位置付けられます。

※港湾計画は、港湾空間（陸域・水域）において、開発、利用及び保全を行うにあたっての指針となる基本的な計画です。
港湾管理者に策定が義務付けられている法定計画です（港湾法第 3 条の 3）。